感覚に関する育ちの現象学

－メルロ＝ポンティにおける沈黙に着目して－

矢野　泉

Phenomenology on Growth of Sense

:Focusing on Silence of Merleau-Ponty

Izumi YANO

横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅰ（教育科学）No.17 別冊

Reprinted from
THE EDUCATIONAL SCIENCES
Journal of the College of Education and Human Sciences
Yokohama National University
No.17, FEBRUARY, 2015

感覚に関する育ちの現象学

－メルロ＝ポンティにおける沈黙に着目して－

矢野　泉

Phenomenology on Growth of Sense
:Focusing on Silence of Merleau-Ponty

1.　序章

“CAUSERIES1948” は、メルロ＝ポンティによって1948年に書かれたフランス国営放送局のラジオ番組「フランス文化の時間」講演原稿をステファニー・メナセが校訂した著作である。（モーリス・メルロ＝ポンティ:9,2011）この著作において、メルロ＝ポンティは、「現象学の徒として『黙して語らない経験こそ、その経験の意味の純粋な表現へともたらすべきである』（フッサール『デカルト的省察』）という言葉を自らの思索のモットーとした」（同前:36）と評された。メルロ＝ポンティは、「黙して語らない経験」の一つに絵画をとりあげている。本稿では、前掲書における動物性に関する思想を解釈し、同伴者としての動物との「黙して語らない経験」を考察する。筆者は、人間と共に同伴者として暮らす動物も、人間の現実に加えたい。1）

> 私たちが生物と呼ぶある種の物質の断片は、それの周囲にその所作ないし行動によって、事物に関する彼らに固有な視覚を描きはじめます。私たちが動物世界（動物性）の光景に同意さえすれば、また一辺の内面性を動物性に対して拒むような無茶をせず、動物性と共に実存しさえすれば、こうした視覚が私たちに出現するでしょう。（同前:234）

人間として共に暮らす動物、本稿では、チワワ・ロングコート 14 歳１か月の雌「ソラ」と、同犬種の「ハル」14 歳８か月の雄、の行動を手掛かりとする。

ソラはおよそ２年前、１か月経ないうちに失明した。失明が始まってからのソラは、めったに吠えることもなく、沈黙を通していた。室内飼いの小型犬は人間の子供に照らすと情動面で２歳児に匹敵するといわれることもある。しかし、人間の２歳児とは違って、言語活動をしないので、所作ないし行動の面で２歳児相当として仮定する。2）チワワの寿命は獣医によると 10 ～ 13 歳であるので、ソラは高齢期を４年間過ごしている。メルロ＝ポンティによれば、動物は行動する生であること、動物の生を考察することの意味は、「動物が課題を解く鍵を持たない世界に投げ出された実存の努力を白日のもとに明らかにし、私たち人間の欠陥や限界を思い出させる」（同前:235）ことである。

人間と犬は習性において境界がある。筆者はメルロが述べた「人間の欠陥や限界」を習性における境界と捉える。人間同士でも食事の仕方が相容れない、所作に類似性がないとい

う理由で、異なるもの同士が共存することを見切ることがあろう。むろん、人間を動物に例えることに無理が伴うとも承知している。たとえば、多文化教育が、互いを排除したり貶めることなく、異文化性を有する当事者たちがいかに育つことができるかを課題とする運動であるとすれば、人間の集団ではなく、異種混交の生における感覚の交差において、新たな感覚(sense)が育つ働きを多様性の教育と捉えてもよいだろうか。

筆者はこれまでの研究活動において、人生の最終ステージを生きると措定した高齢者たちにみられる学習活動、エスニック・マイノリティに注目して学校と地域における多文化教育研究に取り組んだが、それらに通底する主題は感覚の交差であったように思う。現在は、動物と人間の関係における感覚の育ちを探究している。こうした研究を発展させるにあたって、モーリス・メルロ＝ポンティの現象学を、中山元、鷲田清一らの学績に信頼を置きながら、再検討し、現象学の知見から育ちのありようを示唆することはできないかと問いを立てることにした。エドムント・フッサールによって始められた現象学の実りをメルロの知見に求めるのはなぜか。それは、晩年のメルロが「フッサールのいうように知覚対象・認識対象あるいは運動する身体や空間構成を問題にしたのではなかった」(村上靖彦:179,2008)のであり、フッサールが視点を置いた「認識ではなく、触発という視点に身を置いたときの」(同前:同頁)動物を排除しない世界と自己との関係を問題にしたからである。

触発を本稿では感覚による触発と読み替える。習性を異にする多様な生が、感覚を交差させる働きにより、自己が既知の世界の向う側へと越えていく育ちを、飼い主である筆者と高齢犬の日常の暮らしから明るみに出すことが本研究の目的である。

2. 習性の境界が越えられる了解

人間と犬の習性には境界があるが、犬の習性といっても、犬に属する個体がすべて同じ習性を有するかどうかについては即断することはできない。また同じ犬種だからといっても習性が異なる場合がある。本稿で注目するのは、食糞という習性である。食糞の習性は、人間にとっては共に暮らしていく上での人間と動物を隔てる境界といってもよい。

ソラには幼犬のころから食糞行動がみられた。２歳以降成犬となって食糞行動は、飼い主の働きかけにより抑えられたかに見えたが、完全に食糞行動を止めることはできなかった。ソラが食糞をすれば飼い主はすぐに犬専用の液体歯磨きをソラの口の端から挿入した。ソラは液体歯磨きが好きではなかったため、食糞と挿入という反復によって飼い主の視線の先にソラの食糞行動が見られた場合には、次の食糞行動まで間を開けることができた。

ソラにとっては食糞行動が当たり前の習性であるのに対して、飼い主にとってソラの食糞は、匂いや衛生上の問題もさることながら、「してはいけない」習性としか見えなかった。ソラが高齢期にさしかかり、糖尿病を罹患し、身体が衰えてくるにつれ、間を開けることができていた食糞行動が頻繁に見られるようになった。よって、飼い主は途方にくれた。犬の食糞行動については、糞からフードのにおいがするため食べるという説や、飼い主の関心をひくために飼い主が嫌がる行為のひとつとして食糞するという説の他諸説がある。

あるとき、ソラがトイレシートから片づけられていなかった糞をおいしそうに食べながら、飼い主に向けて嬉しそうな視線を送り、口を月の形に広げて舌を出す、いわば楽しく笑っているように見えたことがあった。ソラの嬉しそうな視線と笑っているような所作は飼い

主に対する信頼の現れであった。ソラにとって、飼い主が食糞を嫌がっているということは共有できる問題ではなかった。飼い主は問題を共有できないと見切って以来、ソラに視線を送ることも、ソラからの視線を受け取ることもしなくなった。ソラを共に暮らす視野の外部へ追放したのだ。しかしながら、ソラはずっと飼い主を見ていた。

２週間の間、飼い主は、ソラのほうから頻繁に視線が送られてくることを感受してはいたが、視線に気づかない振りをしていた。そのうち、飼い主は、ソラからの視線をあまり感じなくなったため、しばらくぶりにソラの眼を見ると、ソラの眼は白濁が進み、失明しかけていた。ソラは糖尿病を患っていたので、そのせいで失明する可能性は調べればわかる。しかし、ソラの失明について飼い主が予見することはまったくなかった。失明する可能性は考えられるにもかかわらず、調べることはなかったのである。かくして、ソラはひと月経つか経たないかのうちに失明していった。

失明した当時のソラは、抱きしめられても話しかけられても反応を示さなかった。しかも、失明とともにソラの耳も甲高い音を除いてあまり聞こえなくなった。動物であるソラが植物のようにおとなしくなった。飼い主は、ソラからの視線を遮断した自らの振る舞いを反省した。動物との実存における「人間の欠陥と限界」をソラから教えられたのである。ソラは匂いや振動、甲高い音については知覚できるようであったので、ソラに飼い主が食事を提供する時は、食事皿をカチンと音がするようにソラの鼻先の床へ置くようになった。失明が始まってからのソラに対して、遅まきながら、飼い主は視線を送り、抱きしめ、話しかけ、触れ、食糞されても飼い主のほうが食糞行動と向き合うようになった。そうした世話が繰り返された結果、ソラは表情と活発さを取り戻していった。向き合う、ということは、納得いかないが半ば承認するということである。食糞行動をしているソラを見つければ、ソラに文句を言わずにやさしく抱き上げ、ソラの気を逸らし、食糞の現場ではないところにソラを移動させて排泄物を片づけた。

ソラが飼い主に対してアピールがあるときは、ソラは見えていた時のように吠えたり啼いたり視線を送らなくなり、飼い主が踏みそうな場所に排尿する方向へと変化した。飼い主は家の中でスリッパをはいていたが、あるとき、数か所に排尿がされており、2か所清掃して安心して歩いていたところ、まんまとソラの思惑にはまって、３か所目で滑って打撲し、完治するまで１か月を要した。それからは飼い主のほうが懲りて、スリッパに変えて滑りにくいゴムサンダルを室内で着用することとなった。例外的に１度、ハルの困窮を伝えるために、飼い主が気づくまでソラが大きく吠えつづけたことがあったが、失明してからのソラと飼い主の信頼は沈黙のなかで育まれた。ゲストを家に招き、ゲストの世話をしていた時に、ソラは吠えもせず啼きもせず黙っていたるところで排尿し、ゲストと飼い主を驚かせたこともあった。飼い主がそうした行動に遭遇する時、ソラは沈黙したまま床に視線を落とし無表情を貫いていた。

食糞の習性は飼い主とソラを隔てていた。飼い主がペットシッターの依頼忘れを忘れたせいで、深夜飼い主が帰宅するまで、ソラたちに食事の提供ができないことがあった。糖尿病のソラは長時間空腹でいると血糖値が急落しショック死する可能性があったので、帰宅するなり飼い主はソラを探した。はたして、ソラは栄養が残存している自らの排泄物を食することにより、低血糖症を回避できた。飼い主は聴覚の衰えによりソラには聞こえるはずもない声を上げた「ソラ。ありがとう。よく食糞してくれた、低血糖にならなくてよかった」と。

ふりかえれば、頻繁に食糞するようになっていたのは、糖尿病を患ったころからである。食糞という行動は、低血糖に陥りやすいソラにとって生き続けるうえで必要であったし、ソラだけでなく飼い主にとっても必要な習性であることを、ソラの生命を失いかけることにより、ようやく飼い主は了解したのである。飼い主が踏みそうな場所に排尿するという失明以降の行動も、ハルのように眼で文句を言うことの行動に相当すると飼い主に認識されるようになった。

メルロ＝ポンティの知見には可逆性がある。眼にみえる光景が「可触的性質」と少しも変わることなく触覚に属しているということを裏返せば、触れられる様態は可視的性質と変わることなく視覚に属するといえるのである。「可触的なもの自身、可視性を完全に欠いているわけではないし、視覚的なあり方をもたないわけでもないという考えに習熟しなくてはならない」（モーリス・メルロ＝ポンティ:216,1994）というメルロ＝ポンティ現象学の知見が、異なる習性の了解において検証されたのである。

3. 沈黙と感覚

かかりつけの動物病院の医師に「ソラの目はもう光も感じられないでしょう」と告げられたことがあって、飼い主もそう了解していたが、飼い主がソラを抱いて日光浴させている最中、ソラは光に対して目を細め涙で目を覆ったことがあった。なにかの偶然かと別の日に光のほうにソラの顔を向けて抱いたところ、ソラはやはり眩しそうに目を細めたので、飼い主はソラが光を感受できることを確認した。その後、同じ病院の別の医師にソラの状態について相談すると、「眩しそうにするのであれば、ソラは光を感じています。まったくなにも見えないというわけではなくて、ぼんやり見えている可能性はあります」と診断された。ぼんやり見えるというにはどのような見え方であろうか。

ソラの飼い主は新聞を床に広げて読む習性がある。ソラにとって、飼い主が新聞を床に広げる、それはすなわち、広げられた新聞紙の場所に飼い主が存在するという確認が感官（sens）を通して（モーリス・メルロ＝ポンティ:73,2011）下されることである。sens は感官とも感覚とも訳される。ソラは見えているのではなく、飼い主を感じている。飼い主に用事があって新聞紙を広げたまま床から離れることがある。そうするとソラは飼い主の方向に視線をやるのでもなく、新聞紙の端に身体を接触させて横になっていて起き上がる気配はない。飼い主がその場所から離れても、ソラは飼い主がその場所に留まっているという感覚がしばらくある。そのしばらくという時間を過ぎれば、ソラには飼い主がソラに合図を送らずに一方的にその場所からいなくなったことがわかる。合図をしなければ、ソラから生き生きとした表情や行動の活発さが失われる。したがって、飼い主は、ソラを視野の外部に追いやったまま行動することはできるだけ避けるようになった。ソラの身体を手で軽く触れてその場所から移動することを告げた。

しかしながら、ソラに触れる仕方にはまなざしによってソラを捉えるということもある。飼い主はソラを見ている。見るということは、看るということであり、世話をするということでもある。

見えるものについてのいかなる経験も、つねに視線の運動の文脈のなかで与えられ

ていたのだから、眼に見える光景は「可触的性質」と少しも変わることなく、触覚に属しているのである。見えるものはすべて触れられうるものから切り取られたものであり、触れられるいかなる存在も、いわば可視性を約束されている、という考えに習熟しなければならない。そして、踏み越え、跨ぎ越しは、触れられるものと触れるものの間にだけあるのではなく、可触的なものと可視的なものとの間にもあるという考えに、そして可視的なものは可触的なもののうち象眼され、逆に、可触的なもの自身、可視性を完全に欠いているわけではないし、視覚的なあり方をもたないわけでもないという考えに習熟しなくてはならない。同一の身体が見かつ触れるのだから、可視的なものと可触的なものとは、同一の世界に属している。
（モーリス・メルロ＝ポンティ:同前,1994）

ソラに手で触れるとき、飼い主はソラを眼で看ている。ソラに手を触れないでソラを見るときもソラは看られている。 メルロの知見からいえることは、ソラについてのいかなる経験も、つねに飼い主の視線の働きのなかで与えられているのだから、飼い主の眼に見える光景は「可触的性質」と少しも変わることなく、飼い主の触覚に属しているのである。ソラについて見えるものはすべて飼い主が触れられうるものから切り取られたものであり、触れられるいかなる存在も、いわば可視性を約束されている。可視性を約束されているとは、すなわち、ソラが知覚する世界に入り込み、その世界に住むということは、触れる飼い主の感受と触れられるソラの感受の交差にあるという考え方である。ゆえに、ソラを見ることはソラに触れてソラを看ることであるのだ。ソラについて見ることができ、触れることができる、それは、ソラを看るという同一の世界に属しているためである。

失明しているためなのか、失明に慣れてきたためなのか、尾っぽを丸めておそるおそるものの気配を確かめながら歩いていたソラは、尾っぽを立ててどこになにがあるか把握したうえで歩くようになっていた。それでも、把握しきれないものがあったようで、ソラは眼をどこかにぶつけた。ソラに触れて眼を凝らしたとき、ソラの左眼がいつもと違うことに飼い主は気づいた。そこで、やや緑がかって白濁している瞳の縁に広がる白眼を見るために、飼い主の親指で瞼を押し広げると、白眼は赤く充血し、涙も分泌されていた。瞳に傷はないかと眼を凝らせば、瞳にも傷があるように見えた。ソラを病院に連れて行き、診察してもらった結果、飼い主がソラの瞳に傷を確認したとおり、ソラの角膜は損傷し、損傷を治すための新生血管なるものが角膜にできていた。瞳のまわりの充血は、ソラが眼をこすってできた結膜炎であると診断された。

待合室で薬の調合を待っている間、獣医に教えてもらって獣医から借りた蚤捕用のきめの細かい櫛で、ソラのほつれたやわらかい体毛をほぐしていた。手慣れた獣医のようにはなめらかに操作できなかったが、体毛の塊をほぐしていくとソラは身体を飼い主に預けた。黄粉のように見えた物質は、やわらかい体毛がほつれてできた塊だった。黄粉のような塊を念入りにほぐすことにより、ソラに触れていなかった時間が取り戻されて飼い主とソラに与えられた。その間、ソラは吠えもせず啼きもせず、沈黙があるからこそソラの触覚が研ぎ澄まされているようであった。沈黙はソラの触覚を育てている。失明し聴覚も嗅覚も衰えたソラにとって、沈黙し触れる/触れられるという所作に集中することには意味があったのだ。

ソラより７か月早く生まれたハルの眼にも、わずかであるが白濁が認められるようになっ

た。高齢犬が白内障を患うのは珍しいことではない。２週間ほどで失明したソラに比べるとハルの瞳の白濁の進行は遅い。ハルはよく吠える。いかなる世話が必要なのか眼で訴えることもある。ソラのためにハルが行動することはよくある。書斎のドアをしめ切って仕事に没頭する時間が長くなると、ハルは前肢でドアを開けようとする。ドスン、ドスンと音がするのでドアを開けると、飼い主の足元のほうにハルがいてのそのそと書斎に入り込む。食事はまだか、とか、飲み水がなくなってきた、あるいはトイレをきれいにしてほしいといった意味を眼で訴えたり、吠えて飼い主に洞察させることもあれば、いつの間にかいなくなりハルの代わりにソラが書斎の入り口に近い場所で丸くなって寝ていることもある。

ハルは心臓が悪いので、散歩に出かけたいと要求することはなくなり、遊ぼうと誘うこともなくなった。１年前までは赤い豚のぬいぐるみとよく遊んでいたが、遊ばせようと豚のぬいぐるみを差し出しても、ハルは興味を示さない。まだ若いころのハルとソラは、飼い主にまとわりついてきた。飼い主が床に布団を敷いて寝ていれば、いつのまにか枕にハルの頭がのっていて、背中をぴたりと飼い主の背中くってけて、スゥスゥと寝息を立てていたものだった。飼い主の布団にもぐりこむのが大好きで、飼い主の足元のほうまで深くもぐりこんで眠ってしまい、飼い主がハルの存在を忘れてそのまま布団をたたんでしまおうとして、たたんだ布団の中からハルが発見されるということもしばしばあった。触れられるという所作だけでなく、触れるという所作がよく見られた。

しかしながら、ハルより早く視覚、聴覚、嗅覚が衰えていったソラは、触れることより触れられることが日常化した。たとえば、ソラを抱いて膝の上にのせる。アライグマが前肢でよくするような動きをソラの前肢を交互に動かしてみるが、ソラの表情から何の反応も見えなくなった。前肢を前後に繰り返し動かすという所作は、失明する以前のソラが好んでいたのだが、ソラはただ、されるがまま、ソラの前肢は力が抜けていた。ソラの結膜炎の様子をみるために、ソラの瞼を上へ下へと押し広げているときも、ソラは無表情で沈黙したままであった。ソラを膝から床にゆっくりと降ろすとソラは膝に抱かれていた姿勢のまま床に接する。床で寝ているのだろうかと振り向くと、そこにソラはおらず、ソラはいないだろうと後ろを振り向くと、ソラはそこにいて沈黙したまま伏していた。

沈黙したままで何の主張もないのかといえば、飼い主がリビングに用事があっていってみると、リビングに弧を描くような大きな排尿跡が残されており、片づけるとまた飼い主の気づかぬうちに、リビングの別の場所に排尿の水たまりができていたりといった具合だ。それでは、ソラに触れてかまえばよいのかと抱いて触れてみると、四肢はダラリとしたまま、飼い主の所作に応えるこもなく沈黙を通される。飼い主の期待する応答がないといえば、しかし、まったく応答がないわけではない。沈黙するという応答をソラは行っているのである。すなわち、反応したくないという反応を、ソラのダラリとした四肢と躯体は示さしている。

沈黙を通すソラをそのままにして所用のため外出して半日後に帰宅すると、まずハルが出迎えた。ソラは相変わらず応答しないという応答をするのかと予期していると、ソラも尾っぽを小さくふりながら出迎えた。ソラを抱いてみると、ソラは飼い主の腕に前肢をしっかりとからませてきた。首を伸ばし前かがみになって顔を飼い主のほうに向け、顔を逸らした外出前のダランとしたソラの身体とは異なった。しばらく日光浴をさせていないことに気づいた飼い主は、午後の陽のさすベランダのふんわりした長椅子の上にソラをおいて、蚤捕用のきめ細かい櫛でソラの体毛の絡まりを解きほぐしていくと、櫛の動きにソラも反応して顔の

表情を変えていった。櫛を通して飼い主に触れられていたソラは、飼い主の手がソラの顔の近くに感じると、首を伸ばして舌で飼い主の手を何度も舐めた。舐めることで、世話されているソラが飼い主の世話をした。

先に引用したメルロの知見、「逆に、可触的なもの自身、可視性を完全に欠いているわけではないし、視覚的なあり方をもたないわけでもないという考えに習熟しなくてはならない。同一の身体が見かつ触れるのだから、可視的なものと可触的なものとは、同一の世界に属している。」（モーリス・メルロ＝ポンティ:同前）に立ち返ろう。この知見に依拠すると、可触的なソラ自身、可視性を完全に欠いているわけではないし、視覚的なあり方をもたないわけでもない、ということがいえる。実際、ベランダでソラの体毛の世話を通じて、見る/見られる、触れる/触れられるという同一の世界を享受した時をおいた晩のこと、ソラは見えているかのように、家具と家具の狭い間、ダイニングからリビング、リビングに隣接する部屋、書斎や脱衣所に通ずる廊下を小走りですり抜け、沈黙を破って小走りの間に何度も嬉々として吠えた。

> 身体は単に事実的な意味で見られる物であるだけでなく（私には自分の背中は見えない）、権利の上で見えるものなのだ。身体は、避けることができないと同時に延期されているある視覚に、曝されているのである。逆に身体が触れたり見たりするのは、身体が見えるものを自分の眼前に客観として所有するからではない。見える諸物は身体をとりまき、さらに身体の柵内に入り込みさえし、身体のうちにあって、そのなまざしや手を、外部からも内部からも覆い飾るのである。身体がそれらに触れたり、それらを見たりするのは、ひたすら身体がそれらと同じ家族に属し、おのれ自身、見えるもの、触れられうるものであり、このことを通じて、それらの存在に参与をする手段として、おのれの存在を用いるからである。
> （モーリス・メルロ＝ポンティ:221-222,1994）

メルロが論じる身体とは何か。「身体は根本的にいって、単に見られた物でも、単に見る者でもなく、あるいはさまよい歩き、あるいは集中した『可視性』なのだ」とメルロは述べ、身体の「手とか、眼とかいうものは、基準としての一ある見えるもの・触れられうるものの、対象への関わり以外の何ものでもない」（同前:222）と結ぶ。

序章で、人間とともに暮らす動物も、人間の現実に加えたいと筆者は述べたが、動物と人間を等しく扱うことはできない。メルロの「ラジオ講演 1948」原稿を校訂して著作として送り出したステファニー・メナセによれば、椅子から梯子に飛び移るよう訓練された犬は、椅子の代わりに踏み台が用意されると、踏み台を使って梯子に飛び移ることはできない、つまり、椅子も踏み台も梯子へ飛び移るための道具としての機能があるとまなざす「視点の多様性」が動物の行動には欠けている（モーリス・メルロ＝ポンティ:178,2011）と指摘されている。と同時に、「動物は人間である」という仮説がメルロの哲学思想から示されるとし（同前:280）、誇大な擬人主義を戒めるが擬人主義を認めている。

眼でソラを見て、手でソラに触れる、飼い主の身体は客観的な所有物としてソラを看ているわけではない。ソラの身体、所作に飼い主の主観性が入り込んで、ソラがいかなる様子か、ソラがどのように感じているかを、ソラ自らが語るように飼い主が記述するのである。飼い

主の身体がソラに触れたり、見たりするのは、飼い主がソラの存在を家族という同じ係累に参与する手段として、飼い主自身の身体を用いたのである。飼い主の身体がソラの身体において生き生きと働くことにより、ソラの身体も共振して生き返る。四肢に力強さが躯体には張りが、顔には飼い主と生きる係累として喜びのような表情が現れた。

ソラは眼で飼い主を捉えることはできない。しかし、飼い主の眼で見られ、顔や手や足、胸や腹、尾っぽに触れられることが、ソラにとっては見えない眼で飼い主を見ることであり、飼い主に触れられている間、飼い主に自らが触れているのだと感受し、視野に替わる領野が現れるのである。見られる/触れられる、すなわち、看られることが看ることでもあると感受するようになった。その結果、ソラは前肢を使って飼い主の腕や胸を能動的につかみ、しがみつくことができ、部屋に明かりが灯されれば、目を覚まして起き上がれたのである。

4. 終章

このように、筆者は、ソラの沈黙が飼い主の所作を変容させ、飼い主の所作の変容がソラの身体を変容させたプロセスを記述することにより、暮らしを共にする人間と動物が既知の世界の向こう側へと越えていく育ちを明らかにすることができた。ある朝、飼い主の視線の延長線上に、給水ボトルと受け皿が見えた。給水ボトルはおろか受け皿にも水は一滴も残っていなかった。のどがかわいていたのだろう、ハルあるいはソラが空の受け皿を舐めた跡が残されていた。これまでの飼い主とハルとソラのやりとりを顧みれば、受け皿が空になる前か空になった時に、ハルが受け皿を引っかいたり、飼い主の眼の前に来て吠えて給水を訴えるなどにより、水が補給されたため、給水の皿が乾ききってしまうということはなかった。飼い主が彼らの水の触感の欠如に触発されて、飼い主も渇きに触れ、視線を空の給水ボトルと受け皿に延ばしたと考えられないだろうか。

共に暮らす人間と動物、「われわれの生の別の新たな組織化装置の胎動が聴こえるのであって、そのかぎりでわれわれの共存には、定型化した既成の現実〈世界〉を攪乱するようなある詩的な契機が、つまり現実〈世界〉として編み上げられたもののうちにそこには〈かたち〉をとっていないものを見る能力、あるいは現にあるものと違ったふうに見る共同的な想像力がいつも働いている」（鷲田清一:172,1997）と現象学者の鷲田はいう。「詩的契機」を触覚的な契機と解釈できないだろうか。人間のほうへと働かれる触覚、動物のほうへと働かれる触覚の交差から、現実〈世界〉ではいまだ〈かたち〉をとっていない意味が、人間と動物の感覚に、蜘蛛の巣の網目のような多様な絡まりで示唆される。この示唆に導かれて、既知の世界の向こう側へと越える。後期メルロ＝ポンティの現象学に依拠しながら、教育学者の西岡けいこは、「未来に脱自する意味生成の媒体として」子供を捉え、「尽きない自己変容」を子供の育ち、子供の「尽きない自己変容を迎え入れることとして『教える』」大人を論述した。大人と子供を教育の関係性としてとらえる論考はオーソドックスな教育思想であり、意義深い。しかしながら、本稿では、人間と動物という関係における育ちを問うた。

筆者は、変容する身体を感覚に置き、子供期だけでなく、生涯にわたって繰り返される脱自に関心を持つ。メルロが題材としたマルセル・プルーストは成人期における回想を通じて、自己変容の末に既知の世界の向こう側へと越えたのではないか。したがって、筆者は、人間であれ動物であれ、子供期であれ、成人期であれ、高齢期であれ、生涯にわたり、既知

の世界の向こう側へと越えることを「育ち」という。人間と動物のかかわりを取り上げた本稿で得られた知見を敷衍すると、画一的ではない感覚(sens)が育つかどうかを問う多様性の教育の一辺をも明らかにしたのである。

補遺

本稿では、共に暮らす人間と動物を論考の俎上に載せた。モーリス・メルロ＝ポンティ現象学を読み直すことにより、われわれを包摂する暮らしの教育的知識基盤をつくることになる。本稿でいう暮らしの教育は自己変容としての生涯教育(ēducation permanente)であり(矢野泉,2007:17)、社会教育が学校教育を学校教育が社会教育を排除するようには考えられていない。たとえば、聴いてはいるが応答しない状態、講師にとってはありがたくない様態の沈黙が教室を支配することは、それほどめずらしいことではない。筆者がリカレントした学生として大学院に在籍していたころ、教育社会学の演習において、「聴いているのか聴いていないのかもわからない、無表情でずっと黙っている君たちは深海魚か？」と指摘した講師がいた。確かに沈黙していたが、声なき言語を駆使して思考していたし、講師が発言を求めているのもわかっていた。一斉に沈黙してみると沈黙を破るのもどうしたものかと判断した上での深海魚状態である。メルロ＝ポンティは沈黙を間接的な言語活動だと指摘した。(モーリス・メルロ=ポンティ:58-129,1969)黙して語らずにいる経験、それは声に出してはいないが、沈黙において能動的に交差される言語活動である。黙して語らずにいる経験を言語活動であると検証する方法はあるのかと問われるだろう。沈黙している人を見るとよい。その人の視線がどこに向けられているのか、その人の眼がなにを語っているのか、その人の指先はどこに触れているのか、その人の感覚に接近し、また、距離を置いて鳥瞰する、フィールドワークを徹底する、それが検証方法である。かかる検証方法の基礎をモーリス・メルロ＝ポンティ現象学に尋ねる。もちろん、メルロ＝ポンティ現象学の限界3)については先行研究者たちによって明らかにされていることでもある。しかしながら、 メルロ＝ポンティ現象学に読まれる/呑み込まれる4)のではなく、メルロ＝ポンティ現象学を出発点として感覚の深淵を読み解くことは、メルロ＝ポンティ現象学を新たに意味づける領野を生むことでもある。筆者は、動物としての人間の感覚がどのように育っていくのかを明らかにする教育学を、感覚に関する育ちの現象学と呼ぶことにする。

注

注 1）鷲田清一（2008）によれば、「メルロ＝ポンティは、『病者の行為やさらには動物・幼児ないし「未開人」の行為が、成人や健康者や文明人の行動からの単なる〈解体〉として理解されるものではないこと』に注意を促していたし、精神分析を神話あるいは巫術として、精神分析家を魔術師やシャーマンとして見る可能性を示唆していたが、かれが深い共感を示した構造主義のように『主観なき超越論的領野』まで突き進んだわけではなかった」。メナセはメルロ＝ポンティのラジオ講演原稿の解説のなかで、霊長類の例を引き合いに出して「メルロの否定にもかかわらず、霊長類は象徴的形態の水準における行動を行う持ち主である」（モーリス・メルロ=ポンティ:279,2011）と述べ研究例を２例挙げている。しかしながら、ラジオ講演が行われたのは1948年であり、霊長類、犬などの動物に関する研究では、66年の時を経て、新たな知見が得られている。有情＝意識をもった「sentient　being」と非情＝意識のないもの「non-sentient being」という分類法によると、人間と動物は「sentient being」に分類される（中沢：35,2015）.

注 2）「犬はとても感情豊かな動物で、学習能力も高く、いろいろなことを理解します。犬の脳と人の脳を比べてみると、人でとくに発達している記憶や思考を司る大脳新皮質の部分に違いがあるものの、情動をつかさどる基本の大脳辺縁系にはあまり違いはありません。犬の認知力や問題解決能力は人の２歳児程度とも言われています」
出典*「花王ペットサイトー愛犬と暮らす生活辞典」
http://www.kao.co.jp/pet/dog/jiten/category01/0005.hml.
（最終閲覧日 2014/09/13）

注 3）「戦後フランス思想を席巻する動向をその思索のなかで準備しながらも、ついにその手前でとどまりつづけた」が、「この『身振り』はしかし、続く世代にもしっかりと引き継がれた」（鷲田清一:3/3,2008）と、メルロ=ポンティ現象学に関する解釈の発展性が示唆されている。

注 4）看護学の分野でメルロ=ポンティ現象学に依拠して学究している西村ユミはメルロ=ポンティ現象学に詳しい村上靖彦との対談においてメルロ=ポンティ現象学の「応用」についての違和感と「避けなければいけないのはフッサールやメルロ=ポンティの概念をそのまま使うこと」（西村ユミ+村上靖彦,2014:200）だと指摘した。

参考文献一覧

エリザベート・ド・フォントネ*石田和男・小幡谷友二・早川文敏訳(2008)『動物たちの沈黙』,〈Elisabeth de Fontenay,"Le Since des Bétes".,(1998),Librairie Artème Fayard.〉彩水社:1-779.

フィリップ・グレーニング監督作品資料(2005)「大いなる沈黙へーグランド・シャルトルーズ修道院」配給/ミモザフィルムズ,『EQUIPE DE CINEMA』No.200(2014):1-20,岩波ホール.

加國尚志(2008)「沈黙の詩法ーメルロ=ポンティにおける『沈黙』のモチーフー」『思想』〈メルロ=ポンティ生誕 100 年〉,岩波書店,No.1015:28-54.

中沢新一(2015)「二つの『自然』Dual nature」:35-41,『現代思想』青土社,第 43 巻第 1 号.

中田基昭(1995)「授業の現象学的解明について」『日本教育方法学研究』第 21 巻:1-9.

中田基昭(2008)「身体の感受性についてメルロ=ポンティから学ぶ」中田基昭『感受性を育むー現象学的教育学への誘い』東京大学出版会:129-167.

中田基昭(2011)『表情の感受性ー日常生活の現象学への誘い』東京大学出版会:1-272.

西村ユミ+村上靖彦(2014)「現象学の看護論的転回」『現代思想』〈特集*現代思想の転回 2014 ポスト・ポスト構造主義へ〉第 42 巻第 1 号,青土社:198-213.

西岡けいこ(2008)「脱自あるいは教育のオプティミズムーソルボンヌ講義を起点とする肉の存在論の教育思想的意義」『現代思想』〈総特集:メルロ=ポンティ身体論の深化と拡張〉,青土社,第 36 巻第 16 号:347-357.

村上靖彦(2008)「沈黙と回復ーの主体変容論」『現代思想』〈臨時増刊総特集メルロ=ポンティ身体論の深化と拡張〉,青土社,第 36 巻 16 号:168-181.

M.メルロ=ポンティ*中島盛夫訳(1982)『知覚の現象学』,〈Merleau-Ponty,M.(1945) "Phenomenologie de la perception",Paris,Gallimard.〉法政大学出版局:1-862.

M.メルロ=ポンティ*竹内芳郎監訳(1969)「間接的言語と沈黙の声」『シーニュ 1』,〈Maurice Merleau-Ponty,(1960), "Signes",Éditions Gallimard〉みすず書房:58-129.

モーリス・メルロ=ポンティ*クロード・ルフォール編*中島盛夫監訳(1994)『見えるものと見えざるもの』法政大学出版局:1-583.〈Maurice Merleau-Ponty,(1964),"Le Visible et L'invisible",Éditions Gallimard.〉

モーリス・メルロ=ポンティ*中山元編訳(1999)『メルロ=ポンティコレクション』筑摩書房:1-305.

モーリス・メルロ=ポンティ*ステファニー・メナセ校訂,菅野盾樹訳(2011)『知覚の哲学ラジオ講演 1948 年』(ちくま学芸文庫)〈Maurice Merleau-Ponty, "CAUSERIES 1948",(2002), Établies et annoté par Stéphanie Ménasé, Éditions du Seuil〉

奥井遼(2012)「『沈黙の声』にみる身体的志向性ーわざ研究へのメルロ=ポンティ現象学からの接近ー」京都大学大学院教育学研究科紀要,第 58 号:183-191.

齋藤孝(1999)「身体知としての教養」『教育学研究』第 60 巻第 3 号:29-36.

竹内敏晴(2001)『思想する「からだ」』晶文社:1-238.

鷲田清一（1997）『現象学の視線－分散する理性』講談社:1-198.
鷲田清一（2006）『「待つ」ということ』角川書店:1-335.
鷲田清一（2008）「メルロ=ポンティの身ぶり」『思想』No.1015,岩波書店, 電子版抄録,
http://www.iwanami.co.jp/shiso/1015/kotoba.html.3/1-3/3.
（最終閲覧日 2014/09/13）
矢野泉（2007）「マイノリティの居場所が創る生涯学習」矢野泉編『多文化共生と生涯学習』
明石書店:15-84.